

如月小春戯曲集

KIKI

ANOTHER

新宿書房

家、世の果への……
《大都会》型都市を記した小説

如月小春戲曲集

新宿書房

きんりやくこ はるぎょくしゅう

如月小春戯曲集

家、世の果ての……あるいは《少女と犬》型都市を記述する試み

— ANOTHER

著者——如月小春 © Koharu Kisaragi, printed in Japan, 1982

発行日——一九八二年六月一五日第一刷

発行者——村山英治

発行所——新宿書房 東京都新宿区西新宿一—二二—一 スタンダードビル 〒一六〇

電話東京三四三局六六六番 振替東京七一—二四九七

装丁者——赤崎正一

印刷所——理想社印刷所十福音印刷

製本所——松岳社青木製本所

定価——一三〇〇円 0074-025016-3335

乱丁・落丁本はお取りかえします

都市

ソレハ ユルギナキ全体

絶対的ナ広ガリヲ持チ 把握ヲ許サズ 息ツキ 疲レ 蹴オトシ

ソコデハ 全テガ 置キ去リニサレテ 関ワリアウコトナシニ ブヨブヨト 共存スルノミ

個ハ 辺境ニアリ

タダ 辺境ニアリ

楽シミハ アマリニ稚ナクテ ザワメキノミガ タユタイ続ケル

コンナ夜ニ 正シイナンテコトガ 何ニナルノサ

目次

家、世の果ての……あるいは《少女と犬》型都市を記述する試み

ANOTHER

99

上演記録

183

あとがき

191

家、世の果ての……あるいは『少女と犬』型都市を記述する試み

登場人物

はな子

ブラッキー

ママ

猫河原精肉店

犬屋敷精肉店

猿ヶ島精肉店

百合子

五郎

スーパ―不夜城店員 1・2・3・4・5・6

序章

広く暗い場所。懐中電燈の光がだんだんと近づいて来る。少女である。少女、その光の先に人影を発見。

少女 誰か……居るの？……そこ……。

人影 ……

少女 返事して……もし、生きてたら……で、いいからさあ……。

人影 ……

少女 死……んでの……の？……死んでの……かな……まさか……おい！

近づけば若い男である。ただ静かに呼吸する何千億もの細胞たちの集まりである。

男 ああ……そうだあ

少女 生き……てるの？ 生きてる！ あんたさあ！ ねえ、しっかり！ 駄目だよ、こんなところで

眠っちゃあ！

男 そうだったあ……思い出したよ……。

少女 え？ 何て言ったの？

男 思い出した、言葉だ。

少女 言葉……？

男 忘れてたよ、そうだ、すっかり。言葉ってものがあつたって事も。

少女 あの……生きてるんなら、ちょっと教えてほしいんだ。ここ、出口ある？

男 ない。

少女 だろうと思った、やっぱし。さっきからぐるっと回ってみたけど見つからないんだ。で、もしかしたら、ここ出口ないんじゃないかって予感してた。当っちゃったよ、やな感じ。でもさ、あたし、ここに居るんだから、……てことはつまり、入口はあつたんだよ。そうでしょ？

男 そう、入口はあるんだ。

少女 どういうこと？

男 あるけど外からしか開けられないらしいんだ、ここ。あるだろ、そういう一方的な押しつけて。

少女 なるほどね、閉じ込められたってわけ。

男 当り。やな感じの二乗。でもチャンスはあつたんだよ。お前が入って来た時、その一瞬だけ入口は出口につながっていたんだ。

少女 今更遅いよ。……要するに誰かが気がついて……

男 いやあ、気がつくなんて奇跡、ありえない。少なくとも俺がここに来てからは一度もなかった。
少女 あんた、ここに住んでるの？

男 目を閉じて呼吸だけし続けている事が、もしも生活といえるなら。

—間—

少女 要するに、偶然誰かが扉をあけてくれるまで、駄目、なんだ。

男 そう。又しても当り。やな感じの三乗。

少女 あー、落ち込みそう。だいたい、ここちょっと寒くない？ あの壁の一枚向うは夏よ、夏。ずうっと夏、皆いるのよ。青森県の人なんかも混じってる東京の夏よ。頭来るじゃない、ほんのちよっとの違いであたしだけ落ち込まなきゃならないなんて。

男 そういう仕組の倉庫、うん、倉庫だと思うんだ、ここ。だから仕方ない。俺なんか偶然を待ちすぎて、意識、集中して坐っているうちに、何待ってんのか忘れてしまつて、たった一度のチャンスを逃したらしいよ。俺、とても見離されてる。

少女 腹、減らない？ (ポケットから包みを取り出す) さっき右側の壁ぎわで拾ったんだ。もしよかつたら。

男 そうだ、腹も減ってたんだ。それも忘れてたよ。

少女 しっかりしなよ。元気つけなきゃ助からないよ。

男 いいんだ、諦めてるから。

少女 そういうの、かっこ良すぎるよ。腹減ってるなら喰えばいい、ほら。

男 いいのか、もらっても。

少女 うん。(もう喰っている)

男 何だか少しこわい……

少女 何が？(ひたすら喰う)けっこう柔らかいよ。いい感じだよ。

男 久しぶりだから、食べるって。懐しいっていうか、ときめくっていうか、もつとずっといろいろ
と思い出したりしたらどうしよう……

少女 何だろう、これ。

男 樹や、薬屋や、武蔵野予備校の大きな看板や、ステーションセンターの入口にあるバカでかい時
計や、

少女 おいしすぎるくらい、ああ、たまんないよ！

男 秩父連山一望に見渡せる日の事や、振り返れば煤けた街並の電線と電線の間を通りぬけて何千羽
ものカラスが都心に向かってけたたましく呼びかけるのが。あきれてものも言えず、閉店まぎわ
のアニローリーを聞きながら、街が静かに老いていくのを看取った事を。

少女 何かの肉だよ、きつと。とろけそうだ、体の中で。知ってる？ 蛋白質と酵素は絵の具のよう
に混ざりあって血液になる、なるのがわかる。

男　そして陽が沈んでいくのと入れ替りに、どぎつい灯りのともる裏通りに駆け込むと、誘蛾灯、ボーリング場の裏口に山と積まれたゴミの山、猫が走り抜け、砂利敷きの市立公園には、待ちかねた恋人達の短く暑い夏。うっすらと汗ばむほどに上気した背中越しにお前が老いていく、共に老いていく、共に老いていくのを見ている、あの、ゆったりとした吐き気のような不健康に熱っぽい声音のことを。

少女　このまんまじゃあ、まるで駄目だ！

男、一口かむ。しびれるほどにも。想いの底から立ち上がるのはあの笑い声、明るく、幼児の様に、さらにも明るくふくれ上がり、そしてはじける。光と共に。

そこはスーパー不夜城の店内。仮面の店員達が居並ぶ。

店員達　いらっしやいませー！

店員1　ようこそ、当スーパーマーケット不夜城においで下さいました。あなた様の愚にもつかない暮らしの全てを面白おかしく彩るためのありとあらゆるお品をとり揃えた、この世の天国、その名も地獄。スーパーマーケット不夜城は、あなた様のおいでを今日も心よりお待ち申し上げておりました。

店員2　右の棚には絵のない絵本、背もたれのないサルノコシカケ、不感症の人妻などの特価御奉仕

品の数々を。

店員3 中の棚は当店のお奨め商品です。落とさなくても絶対割れるガラス食器、及び、才女のびん
詰め、土人の干物^{ひもの}、エトセトラ。

店員4 左の棚には、特に高級ブランド商品ばかり集めてみました。やせたブタに、糖尿病のソクラ
テス、百グラム三十円のヌーベルバーグの巨匠の愛人等、よそでは決して手にはいらない新鮮な
お品ばかりです。

店員5 尚、お求めのお品が万一かみついたり、結婚を迫ったりいたしましたしても、当店ではおひきと
りかねますので、何卒、御了承下さいませ。

店員6 さあ、お早くしないと売り切れます。いかがわしくも心誘^{いざな}う商品の数々、あなたの暮らしを
ドラマチックに演出するために、不夜城は年中無休でお待ち申しあげております。

店員達 不夜城はスーパーマーケットのホームラン王です!!

ショーウィンドーに並べられたマネキン達が、機械仕掛けの様にくるくる回る。

店員達 いらっしゃいませー!

男のマネキン1 僕達、愛シ合ッテルンダ。

店員1 ああ、殺し合っ^ていらっしゃるんですね。

女のマネキン1 私、朝カラ晩マデ、彼ノ事以外何モ考エラレナイノ。

店員2 思考能力のIQが精薄なのですか。

男のマネキン2 一緒ニ暮ラソウト思ッテルンダ。

店員3 なるほど、定年後はウラジオストックでの抑留生活の体験談でも書いて生活費が稼げたらと思っ
ていらっしゃるのですね。

女のマネキン2 私、一生懸命アナタニ気ニ入ッテモラエルヨウニオ料理作ルワ。

店員4 売り込みに必要な金とスタッフと、マスコミ関係にコネのある評論家を二、三人手配しても
raithたいという訳ですね。

男のマネキン3 君ノ作ルモノナラ何ダッテ気ニ入ルサ。

店員5 という世論を真にうけて三カ月とたたないうちに落ちぶれて、角の小間物屋でストッキング
万引したっていう元アイドル歌手がはいていた赤い靴が欲しいとおっしゃるのですね。

女のマネキン2 アナタサエイレバモウ何モイラナイ！

店員4 というような、男に逃げられないための殺し文句のコピーを特集した去年の夏の特集号なら
二階の書籍売場でございます。

男のマネキン1 愛シテルヨ、百合子、モウ離サナイ！

市立公園のベンチである。誘蛾灯の下で若い男女、五郎と百合子が寄りそっている。アベックの
林立する中に、ポツン、ポツンとポプラが緑を萌やしているかのような。遠くで「さみしさの

オー」とか「かなしくてエー」とかいふ露骨なバイブレーションの一番前のニューミュージックが、ラジオからのように流れている。初夏。

五郎 百合子、本当に俺について来てくれるのかい。

百合子 ええ、私決めたのよ。

五郎 俺の会社は二流だぜ。

百合子 わかってるわ、そんなこと。

五郎 今年の秋はボーナス出ないぜ。

百合子 わかってるわ、そんなこと。でも週休二日制でしょ？

五郎 もちろんさ、百合子。しかも有給休暇は三週間だ。

百合子 うれしいわ、五郎さん。今の亭主は自営業の商店だから、まとまった休みはないし、最近は

お正月だって二日からあけてるの。

五郎 俺はお前にそんな苦労はさせやしない。そんな亭主、チリ紙と交換して、早く僕のところにおいで。五時のチャイムが鳴るか鳴らないかの内に仕事はっぱり出して、お前の待っている公団住宅まで走って帰って来る。

百合子 いいのよ、五郎さん、走ったりしたら靴の底が減るわ。減ったら新しいの買い替えなくちゃならないし、買うためには私もヤクルト配らなくてはならないから、たまには会社の方とゆっく